

〈黄帝と老子〉雑観 第9回

## 天地人三才思想の源流は黄老文献にあり

『黄帝内経』は戦国の「天道」思想を引き継ぐ（その3）

『黄帝内経』 研究家 松田博公

ツイート 0

いいね! 3

- 第4回 [『黄帝内経』に近いのは『老子』か『荘子』か  
重層的な無の宇宙論と遍満する気の宇宙論](#)
- 第5回 [勃興する戦国黄老思想 『黄帝内経』への遙かな道](#)
- 第6回 [『黄帝内経』と戦国黄老の気の系譜 『黄帝四経』から『春秋繁露』まで](#)
- 第7回 [『黄帝四経』～『春秋繁露』を貫く機械論的宇宙観  
『黄帝内経』は戦国の「天道」思想を引き継ぐ（その1）](#)
- 第8回 [『黄帝内経』には天を畏れる災異思想の痕跡がある？  
『黄帝内経』は戦国の「天道」思想を引き継ぐ（その2）](#)

前回、わたしたちは『黄帝内経』（現存の『素問』『靈樞』を総称して便宜的にこう呼んでおく）が間違いなく『黄帝四経』から『春秋繁露』に至る黄老文献の系譜上にあることを確認した。「天に法り地に則り治療すべし」とする『黄帝内経』の思想は、黄老文献の「天道」思想の機械論的宇宙論の直系であり、天を畏怖する災異思想さえ痕跡として保存していたのである。『黄帝内経』は、諸子百家の思想から気に入ったものを踏襲したというような通説とは違い、諸子百家を統合した戦国末の思潮、黄老思想の基盤の上に成立したのであった。それにしても、政治的な災異思想さえも『黄帝内経』に流れ込んでいるとは、作業を開始した当初の予想を超える驚きであった。わたしたちは、改めて、『黄帝内経』の成立史について、研究の視野を広げるべく要請されているのである。

さて、前回は『黄帝内経』と黄老「天道」思想の同型性を探る総論だとすれば、今回はその各論である。医学には、法則性が必要である。医学が経験の蓄積の段階を脱し、生理学、病理学、診断学、治療学などの体系を持つには、基準となる法則性が欠かせない。『黄帝内経』はそれを天地宇宙の法則とした。治療する際、天地宇宙の法則に順えば成功し、逆らえば災いが起こる。読者諸兄姉は、その法則とは、陰陽論であり、五行論では



今週号のPRの部屋はこちら

●変形徒手矯正術セミナー  
(2014/12/7)

■ヒューマンワールドのセミナー

●「情報コーディネーター鍼灸」セミナー  
(2014/12/14)

★ヒューマンワールドの本なら→→→→→ [こちら](#)

★ヒューマンワールドのDVDなら→→→→→ [こちら](#)

■投稿原稿募集

週刊『あはきワールド』では、研究レポート、論説、症例報告、エッセーなどの投稿原稿を募集しています。

★詳細は≫≫ [こちら](#)

★メディカル求人天国  
鍼灸マッサージ師・柔道整復師の求人情報は≫≫ [こちら](#)

ないかと言うかもしれないが、陰陽論、五行論自体が天地宇宙の法則を使うための論理的、技術的ツールであったことを思い起こしていただきたい。この考え方を、『黄帝内経』の原型を作った医師たちは、オリジナルに創造したのではない。黄老「天道」思想を根拠に練り上げたのである。ここまでが総論である。

■ヒューマンワールドのメールマガジン「あはきワールド」は毎週水曜日に配信しています。

★配信登録は»» [こちら](#)

では、その「天道」思想が考えた「天」の構造や「天」を形作る「気」の動態とはどんなものだったのか。その視点で『黄帝内経』を眺めると、すぐに目に入る特徴的な概念がある。一つは、世界を天・地・人の三層構造に分割し、その統合を図る天人合一論であり、これは後の時代に「天地人三才思想」と名づけられたものである。もう一つは、「気」は途切れなく流れ、循環するという捉え方である。天も地も人もすべて気で満たされ、相互に繋がり、その気は「終わりて復た始まる」形で円環しているというのである。今回と次回、「天道」思想の各論として、この二つの概念が、戦国末の黄老文献を源流に、『黄帝内経』まで一貫した系図を作っていることを論証してみよう。このことも、従来、語られてはこなかったのである。

#### ◇天の時、地の利、人の事を知る

古代中国で「三才思想」がいつ形成されたかは、明らかではない。しかし、すでに新石器時代、人々は農業、牧畜を営み、天の四季の順調な巡りと地の万物を生育する働きで生かされていることを自覚し、天、地、人の関係を正しく守ることが生産や信仰、政治の要であることに気づいていただろう。黄老思想が、春秋時代の呉越戦争を記録する『国語』越語下篇の主人公、范蠡（はんれい）の言説を引き継ぐことは、前回、触れておいたが、そこにおいて范蠡は、「天道」思想と同様、「三才思想」についても語っていたのである。

呉を討つことをはやる越王、勾踐（こうせん）を、まだその時にあらずといさめる宰相、范蠡は、次のように言う。

「[国力の] 満（みつる）をまもる者は天にのっとり、あやうき（＝国家の危機）を定（やす）んずる者は人にのっとり、事を節する（＝浪費を節約する）者は地にのっとり」

また、「それ人事は必ず將に天地と相参じて。然る後に乃ち以て功を成すべし」と天地人の条件が一致した時でなければ敵国を攻撃すべきでない」と論ずるのである。この統治や軍略の原則は、『黄帝四経』に、より定型化した形で示されている。

「天下に王たる者の道は、天あり、人あり、地あり。三者これを参（ま）じえ用いて、よく天下をもつ」（『経法』）

「王者は幸（＝幸運）をもって国を治めず、国を治むるにもとより前道

(=踏むべき道)あり。上は天の時を知り、下は地の利を知り、中は人の事を知る」(『十大経』)

『黄帝四経』は、一説に東方の山東に覇を唱えた齊国で書かれたとされているが、同じ齊国の「稷下の学」が生んだ黄老書『管子』には、次のようにより詳しい内容に豊富化されている。

「天は時を以て権(=権威、権力)と為し、地は財を以て権と為し、人は力を以て権と為し、君は令を以て権と為す。天の権(=天の時)を失わば、則ち人、地の権を失う」(山権数)

「天の時を審(あきらか)にし、地の生ずるを物とし(=収穫し)、以て民の力を輯(あつめ)る」(君臣下)

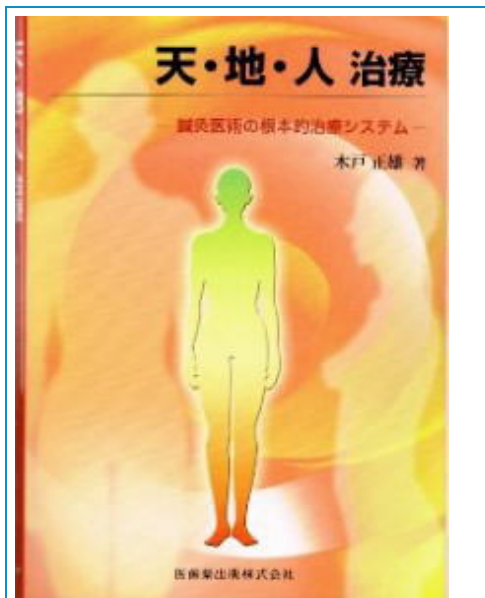
「上はこれを天の祥(しょう、=よい兆しの時節)に度(はか)り、下はこれを地の宜(ぎ、=農耕、牧畜に適した時期)に度り、中はこれを人の順に度る。此れ謂う所の三度なり。故に曰く、天の時、祥ならざれば、則ち水旱(すいかん、=洪水と干ばつ)あり。地の道、宜(よろ)しからざれば、則ち饑饉あり。人の道、順ならざれば、則ち禍乱あり」(五輔)

齊を滅ぼして中国を統一したのは西方の秦国であった。その秦で宰相、呂不韋が来たるべき帝国のために編纂した『呂氏春秋』にも、「三才思想」は場所を得ている。

「是の月や、以て兵を称するべからず。兵を称すれば必ず天殃(てんおう、=天が降らす災い)あり。兵戎(へいじゅう=戦争)を起さず、以て我より始めるべからず。天の道に変わるなかれ、地の理(=筋道)を絶つなかれ、人の紀(=紀律)を乱すなかれ」(孟春紀・正月紀)

「蓋し聞く、古(いにしえ)の清世は、是れ天地に法る。凡そ[ここにまとめた]十二紀なるもの(=書物)は、治乱存亡を紀すゆえん(=手段)なり、寿夭吉凶を知るゆえんなり。上はこれを天に揆(はか)り、下はこれを地に驗(ただ)し、中はこれを人に審(あきらかに)す。此の若くすれば、則ち是非、可不可、遁(のが)るる所なし。天を順といい、順なれば維(こ)れ生く(=天道に順応すれば生長する)、地を固といい、固なれば維れ寧(やす)し(=固い意志を持てば安寧である)。人を信といい、信なれば維れ聽(したが)う(=信ずることを以てすればみな従う)。

三者咸(みな)当れば、無為にして行われる。行うとはその数を行うなり(=法則性に則る)。その数を行い、その理に循(したが)い、その私を平にするなり(=理法に従い私欲を取り去るの



木戸正雄著『天・地・人治療—鍼灸医師の根本的治療システム』(医歯薬出版、2009)

である)」（季冬紀・序意）

このように、戦国の伝統思想となった「三才思想」は、前漢帝国前・中期の武帝時代にも踏襲されていく。淮南王劉安編纂の『淮南子』にはこうある。

「食は民の本なり。民は国の本なり。国は君の本なり。是の故に人君は、上は天の時に因り（＝順い）、下は地の財を尽くし（＝充分活用し）、中は民の力を用う」（主術訓）

黄老道家と老荘道家の思想を盛り込んだ『淮南子』を横目で見ながら、董仲舒が儒家の立場から黄老思想を取り込んだとされる大著『春秋繁露』は、「三才思想」に、儒家の道德観から入念な仕上げを施している。

「曰く、天地人は万物の本なり。天、これ（＝万物）を生み、地、これを養い、人、これを成す。天、これを生ずるに孝悌（＝先祖を敬い、兄弟を愛する心）を以てし、地、これを養うに衣食を以てし、人、これを成すに礼楽を以てす。三者は相手足と為り、合して体を成す。一も無かるべからざるなり。孝悌無ければ、則ち其の生ずる所以（＝手段）を亡（うしな）い、衣食無ければ、則ち其の養う所以を亡い、礼楽無ければ、別ち其の成る所以を亡う」（『春秋繁露』立元神）

「天の徳は施、地の徳は化、人の徳は義なり。天の気は上、地の気は下、人の気はその間に在り」（『春秋繁露』人副天数）

#### ◇一は天、二は地、三は人

このように、黄老文献に彩りを与えてきた世界三層構造論、すなわち「天地人三才思想」は、そのまま『黄帝内経』に流れ込み、診断・治療、技術の枠組みとして重要な役割をになうのである。

「賢人は上は天に配して以て頭を養い、下は地に象（かた）どりて以て足を養い、中は人事に傍（なら）いて以て五藏を養う」（『素問』陰陽応象大論篇）

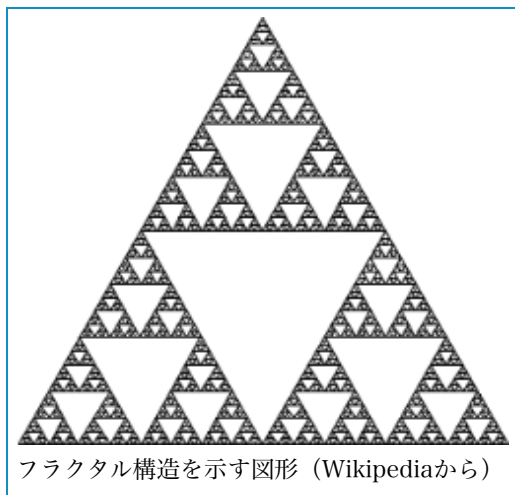
「夫れ道なるものは、上は天文を知り、下は地理を知り、中は人事を知れば、以て長久すべし」（『素問』気交変大論篇）

「天地の至数は、一に始まり九に終わる。一なるものは天、二なるものは地、三なるものは人、因りてこれを三にし、三三なるものは九、以て九野に応ず。故に人に三部あり、部に三候有り、以て死生を決し、以て百病に処し、以て虚実を調じて、邪疾を除く」（『素問』三部九候論篇）

「余、小鍼を以て細物と為すなり。夫子（＝先生）乃ち上はこれを天に合し、下はこれを地に合し、中はこれを人に合すと言う。余、以為（おもえ）らく、鍼の意を過ぐと（＝鍼と関連させて天地人を語るのは大げさではないか）。願わくば其の故を聞かん。岐伯曰く、何れの物か天より大な

らんや。夫れ鍼より大なるものは、惟（ただ）五兵（＝弓、矢、矛、戈  
[か、ほこ]、戟 [げき、ほこ] など5つの兵器）なるもののみ。五兵な  
るものは死の備なり。生の具に非ず。且つ夫れ人なるものは、天地の鎮  
（＝天地万物のなかで最も重要な存在）なり、其れ参ぜざるべからざる  
か。夫れ民を治するものは、亦唯だ鍼のみ。夫れ鍼と五兵と、其れ孰（い  
ずれ）か小なるか」（『靈枢』玉版篇）

医学は、現代の西洋医学であろうと、古代の中国医学であろうと、基準  
を立てて治療対象の身体や病気の原因である気象、環境、生活条件などを  
分類する。そうしなければ、治療原則が成立しない。宇宙論的医学である  
『黄帝内経』の医学が、その分類原理の基礎として、世界を三層に分割す  
る天人合一の「三才思想」を採用したのは、ごく当然のことであった。



この三層構造論は、やがて天・  
地・人それぞれの層が、さらに天・  
地・人に分かれ、その各々が、さら  
に天・地・人に分かれるというよう  
に、同型性を持った微細で無限の世  
界分割論に進化していく。上に引用  
した『素問』三部九候論篇には、そ  
れが見える。天地宇宙の三層構造と  
対応している身体を三部に分け、そ  
のそれぞれを天・地・人に分けて脈  
診を行うというのである。

こうした無限分割の世界構造論は、やがて道教において、「一粒の粟に  
世界を藏し、半升の鍋で山川を煮る」という修行の要諦を生み出す。しか  
し、このような発想は、中国にだけあったわけではない。西洋の中世キリ  
スト教は、大宇宙（マクロコスモス）に対して身体を小宇宙（ミクロコス  
モス）と捉え、両者の照応関係を強調しながら、「神は細部に宿りたも  
う」と説いた。現代では、フランスの幾何学者ブノワ・マンデルブロが、  
自然界では部分が全体の相似形になっていることが多いことを研究し、そ  
れをフラクタル構造と名づけた。

ところで、木戸正雄の『天・地・人治療—鍼灸医術の根本的治療システ  
ム』（医歯薬出版）は、『素問』三部九候論からフラクタル幾何学までを  
視野に入れた、「三才思想」の臨床応用の書として注目に値する。本書  
が、中国の戦国思想から現代の西洋科学哲学までを射程に入れた宇宙論的  
鍼灸学を構築しようとする果敢な試みであることが、黄老文献の考察を通  
して、わたしにはいっそう実感をもって理解できたのである。



★この記事に対するご意見や感想をお寄せください»» [Click Here!](#)

[HOME](#)

**HUMAN WORLD**  
ヒューマンワールド

[書籍](#) | [DVD](#) | [CD-R](#) | [セミナー](#) | [お宝市場](#) | [求人天国](#)

[株式会社 ヒューマンワールド](#)

東京都西東京市田無町7-18-4 TEL.042-444-3678 FAX.042-462-1231

Copyright(c) Human World Co.,Ltd. All rights reserved.